

# 好きな教科と苦手な教科

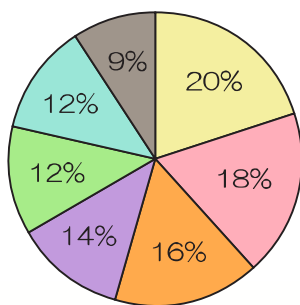
## データから見た生徒の気持ち

学校で好き嫌いと言えば、まず「給食」が思い浮かんでしまうのは、遙か遠い昔に生徒だった世代だからでしょうか。古い諺にも“人の好みは論じ難し”という言い回しがあり、物事に対する“好き嫌い”は誰にでもある身近なテーマとして、時に悲喜こもこもの事態を巻き起こす手強いテーマとして、古の昔より存在してきたのでしょう。

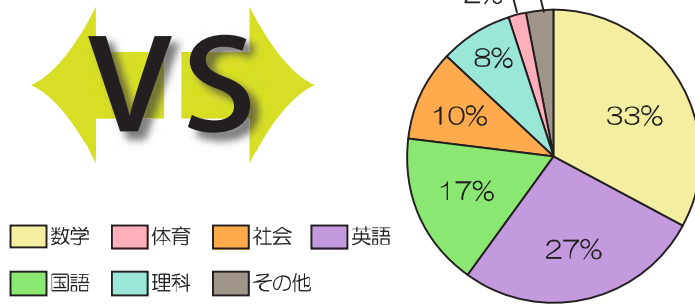
以下に報告しますのは、エスケイケイが平成26年に行った「好きな教科・苦手な教科のアンケート調査」に基づいています。このアンケートは中高生を対象に、学年・性別・学力などが偏らないように配慮し、約4000人の回答（複数回答可）から得たデータです。アンケート調査の全体は膨大な内容なので、このリーフレットではその中から、現場の先生方の参考になりそうな項目を選んで紹介し、簡単な考察を添えたいと思います。



🔍 グラフ1：「好きな教科は何か？」



🔍 グラフ2：「苦手な教科は何か？」



グラフ1を見ていただくと、好きな教科として生徒たちが回答したベスト3は「数学」「体育」「社会」の順になります。全体の順位はこうですが、実際には男女差があり、この順番は男子の傾向が強く反映されています。女子の順番はかなり違って、「英語」「数学」「国語」の順にトップ3ですが、順位差の小さいところ（好みバラける傾向）が女子の特徴です。

ともあれ、このアンケートからは今時の生徒が一番好きな教科は「数学」ということになります。もしかしたら、この結果が一番驚かれるのは、「数学」の授業を担当されている先生方かもしれません。「自分の授業を見ていて、数学好きの生徒が一番多いとはとても思えない。」という声が聞こえてきそうです。

実はその点について納得できる理由があるのですが、その説明は苦手な教科の順位を見た後にしましょう。

グラフ2から苦手な教科のベスト3は、「数学」「英語」「国語」の順番になります。そう、「数学」は好きな教科でも苦手な教科でもトップという面白い結果になりました。さらに言えば、同じトップと言っても、好きなほうでは全体の約20%の得票率であるのに対して苦手なほうでは30%超の得票率（ちなみに女子に限れば約40%の生徒が苦手だと言っています）ですから、非常にメリハリの効いた好かれ方（嫌われ方？）をしていることがわかります。また、「英語」や「国語」といった語学系を苦手とするのは男子に多い点も、興味深いところです。

それではなぜ好きな教科、苦手な教科といった違いが出てくるのでしょうか。好き嫌いの意識はどうして発生するのか、アンケートにある生徒たちの言い分に耳を傾けてみましょう。

## 好きになった理由

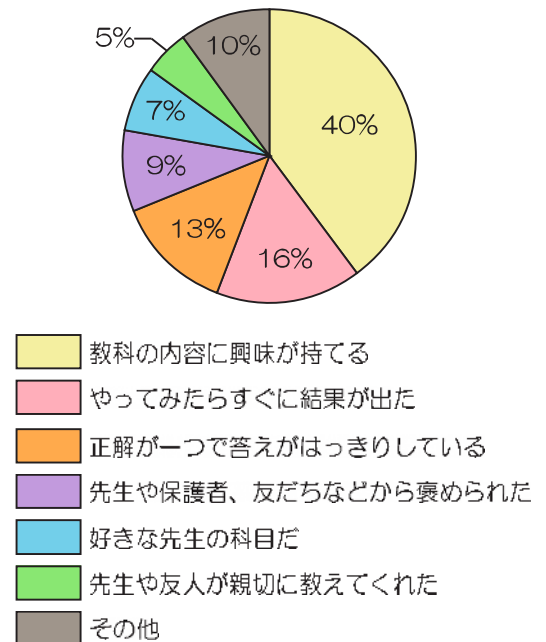
「好きになった理由」のベスト3は、グラフ3の通り「教科に興味  
が持てる」「すぐに結果が出た」「正解が一つ」となります。

とりわけ、「教科に興味を持てる」は全体の約40%を占めており、  
個別の教科の多くでもトップの得票率、正しく教科を好きになるため  
の王道の動機と言えます。もちろん、「それはわかったが、では  
どうすれば、その教科に興味を持たせることができるのか？」という問  
いかけへの解答は容易ではありませんが、生徒の教科への意欲アッ  
プを考える時に思い起こすべき原点と言えるでしょう。

続く「すぐに結果が出た」も広範な教科で支持されていますが、  
3位の「正解が一つ」はやや事情が異なります。すなわち、「数学」  
で約35%と非常に高率の回答、「社会」や「理科」でも比較的  
高い回答ですが、それ以外の教科においてはほとんど選ばれていません。

この点から、「数学」が支持される理由の大きなものは、「正解が  
一つ」であること、正解・不正解が紛れようもなくはっきりしており、  
綺麗に論理で割り切れるところにありそうです（中学・高等学校の数  
学においては殊にそうだと言えるでしょう）。

🔍 グラフ3：「その教科を好きになった理由は？」

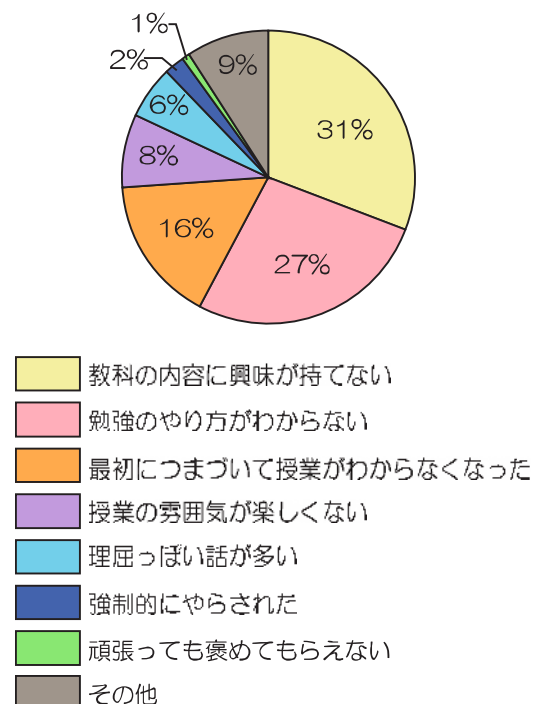


## 苦手になった理由

「苦手になった理由」のベスト3は、グラフ4によれば「教科に興  
味が無い」「勉強の仕方がわからない」「最初につまずいて」の順に  
なります。この3つで、全体の約75%を占めています（体育を除い  
た各教科での占有度も概ね同程度）ので、これらへの対応が生徒  
の勉強に関する動機付けの中でも重要なものであることは間違いあり  
ません。それは、先生方の教育現場で感じておられるところと違和  
感のないものと思われる。

また、教科で見たときに「社会」や「理科」は“教科への興味”  
が持てないと苦手意識が強まりやすく、「国語」や「英語」が苦手  
な生徒は“勉強のやり方がわからない”と訴えている点特徴です。  
語学の場合、長い文章を理解したり、大意を汲み取ったりといった  
漠然とした部分への対策のとりくさが指摘できるでしょう。また、「英  
語」と「数学」は“最初につまずき”が後々尾を引いて苦手意識  
を生み出すパターンが多いので、最初のハードルをいかに丁寧にクリ  
アさせるかが肝心と言えます。

🔍 グラフ4：「その教科を苦手な理由は？」



## ～特徴のある「体育」～

いろいろな教科の中で、「好きになる」あるいは「苦手意識を持つ」に関して、その理由が他の教科と著しく違っていたのは「体育」です。それは、好きになる（苦手意識を持つ）理由として単純に「スポーツが好き、楽しい」という理由がトップである点にも現れています。つまり、「体育」においては教科としてよりも、生徒個人がもともと持っている嗜好性がストレートに出てしまう（好きか嫌いか、最初から決まりやすい）面は否定できないでしょう。

ただ、それでも“身近な人から褒められた”ことが、体育を好きになる理由の中で比較的高く出ている点は心に留めておきたいところです。



## さいごに…

さて、今回のアンケート結果をどのように教育現場で生かすことができるのでしょうか？ 大きく二つの考え方がありそうです。

一つめは、そのままシンプルに適用することです。たとえば「教科の内容に興味を持てる」はどの教科にも見られた理由ですが、これはくだけた表現をするならば、生徒の「何故だろう？」「へー！面白いな。」を引き出す働きかけと言えるでしょう。

日頃先生方が心を砕いて、クイズや実話の導入から、大道具小道具を用いた授業の工夫をされていますが、それらはまさしく“生徒に興味を持たせるための手段”に他なりません。先生方は、その高い効果を経験的につかんでおられるのだと思います。

二つめは、複合的な効果を狙うやり方です。実のところ、教科によってはシンプルな手法のみでは十分な効果が現れにくいものがあるようです。たとえば数学について考えてみましょう。数学においても「興味を持てる」ことが好きである理由に選ばれていますが、その比率は全ての教科の中で最下位です。それは何故でしょうか？ 興味を持つためには“最低限のわかった感”が必要ですが、ここで数学の持つ特性（＝正解が不正解のどちらかしかない）が災いしていると考えられます。他の教科であれば、部分的であってもわかれば面白く思えますし、○×だけでなく△も有り得るわけですが、数学ではそれが困難です。数学が好きな生徒が支持した三つの大きな理由（「答えが一つである」「やってみたらすぐに結果が出た」「教科に興味を持てる」）は、単独ではなく右記のように関係性を持って並んでいると思われる。

もちろん、このように綺麗な循環をするケースは稀かもしれません。しかしこれは、今回のアンケート結果に見られた「好きな人はすごく好き、嫌いな人はすごく嫌い」という、数学の持つ二極化傾向をうまく説明している面白い仮説だと思います。いえ、ことは数学に限りません。教科によって、取り組む中で生徒に発生する気持ちの流れが違っているはずで、その流れに着目し、教科ごとに体系付けられた学習の処方箋が発案されれば、生徒の学習意欲アップにつながる可能性が大いにあります（個人的に実践されている先生は、きっとおられると思いますが）。この文章をお読みの先生方にも、ぜひ一考願えればと思います。



### ☆「答えが一つである」（鮮やかに謎が全て解ける）

- ⇒ 「やってみたらすぐに結果が出た」  
（一つわかれば解き方がわかり、大きな成果がある）
- ⇒ 「教科に興味を持てる」（面白くて、気持ちよい）
- ⇒ 「他の謎にも挑戦」
- ⇒ . . .